

流れに関する試論

レバノンからの視点

池 田 昭 光

On Flow in Lebanon An Essay

IKEDA, Akimitsu

It is normally considered that Lebanon is a country based on a confessional structure. The Lebanese themselves talk about their country or society from this perspective. But I failed to talk to them this way, because people tried to avoid collective categories being manifested in communication. It is true that in certain situations people use terms such as “Maronites” and “Sunnis” clearly. But once we respond to such use by the same terms, people stop talking. The Japanese anthropologist Masaki Horiuchi argued that we should consider that Middle Eastern societies could be based on a different socio-cultural logic that is not structured by Western, clearly demarcated categories. He refers to Clifford Geertz’s idea about bazaar-type society. He then proceeds to suggesting that we explore “non-demarcated thought/society.”

Horiuchi suggested that we consider “dialogue” in a much broader way including “negative” responses such as silence or avoidance of communication. I argue that how the Lebanese people treat their neighbors who are considered to be “spies” reflects his discussion. People always fear spies, and they “know” of their existence in the very environment in which they live. They talk, doubt, exchange information about spies, but at the same time they do not care whether they really exist. It is, instead, important that information always “flows.”

Based on these remarks, I show the example of everyday small actions from my fieldwork materials. Here, an old man tries to close the shutter of his house, but at the same time he tries to avoid showing his intention to close it. He keeps the situation open so that there is always “flow.”

Keywords: Lebanon, flow, non-demarcated, dialogue, information

キーワード: レバノン, 流れ, 非境界, 対話, 情報

* レバノンでの調査・研究にあたり、「文部科学省平成19年度大学教育の国際化推進プログラム」および「平成22年度日本学術振興会特別研究員奨励費」の助成を受けました。また、原稿作成において、本誌の二名の査読者ならびに佐久間寛氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）から適確なご批判およびご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。もちろん、本稿の内容はすべて筆者に責任があります。

We can argue that people put importance on “flow,” but that each action within it seems ephemeral. So the idea of “flow” can lead to a new perspective that reflects peoples’ real concerns. Even though I present here a small sample, the cultural logic internal to it could contribute to larger issues such as the Lebanese confessional structure of society.

- 第1節 ある「失敗」の経験
- 第2節 堀内正樹の問題提起
- 第3節 レバノンにおける情報の流れ

- 第4節 シャッターを閉める
- 第5節 区切りと流れ
- 第6節 展望

第1節 ある「失敗」の経験

レバノンは、中東諸国のなかでキリスト教徒の割合がもっとも高い。さらに、イスラームおよびキリスト教のおよそ17の宗派が、個別に政治的な代表を選出し、そのあいだで権力を配分する「宗派主義／宗派体制 (*al-ta'ifiyya*)」にもとづく国家である¹⁾。この話は広く行き渡っており、ことさらに学術的なものではない。一般のレバノン人も、自国を説明する際、宗派主義的な観点をを用いることはよくある。だからといって、こちらの方で、宗派主義的な意識を前提とする地点からコミュニケーションを出発させようとする、うまくいかない。こちらが集団やカテゴリに依拠しながら話をすすめようとしたら、あるいは、そのような状況が生まれそうになると、その場が緊張し、集団やカテゴリや一般化そのものを打ちけすような言動を人びとがするようになる。たとえば、次のような場合だ。

筆者が調査をおこなっていた地方の町で、とある若い夫婦の自宅にいたときのことである。兩人ともスンナ派のイスラム教徒で、三人の子がいる。筆者は、この夫婦とその子どもたちと一緒に、居間でテレビを見ていた。とくにどの番組を見ようというのではなしに、父

親がリモートコントローラーでチャンネルをときどき切りかえていた。そのうちのとあるチャンネルで、ギリシア正教のものと思われる礼拝の様子が映しだされた。すると、4歳ぐらいの息子がテレビに近づき、画面を指さして、「これはキリスト教徒だ」と、筆者に言った。その様子を見た母親は、すぐさまその子のほうへ寄った。彼女は、いくらか力をこめながら彼の腕をとって、「失礼でしょう」と言いながらテレビから引きはなした。そして筆者に向かい、険しい表情で「似たようなものです (*miil ba'ada*)」と主張した。そのときの出来事や、母親の剣幕にたいして驚いていると、彼女はふたたび、「イスラム教徒とキリスト教徒は、似たようなものです」と強い口調で言った。

その後、筆者自身が同様な発言をしたときにも、類似の反応が返ってきた。そういうときは、筆者はたいてい、宗派間の関係について興味をもち、宗派集団にかんする自他認識について質問をしようとしていた。あるとき、ギリシア正教徒の女性が、マロン派のキリスト教徒はイスラム教徒のように頻りに礼拝をするとか、かれらは今でこそ裕福だがかつては貧しかったということを言った。つまり、「マロン派キリスト教徒」という集団概念を主語に立て、かつ、他の宗派との比較について話していたのである。そのため、この状況であ

1) 以下、アラビア語レバノン方言の転写表記にあたり、長音の表記等、特殊文字は用いない。

れば、おなじように比較の視点をもちこみながら宗派間の関係について尋ねても大丈夫なのではないかと思った。そこで、ギリシア正教とマロン派のちがいは何かと尋ねてみた。すると、「みんな神に由来しているのです (*kell min Allah*)」という返事がかえってきただけで、彼女はそれ以上の詳細を語ろうとしなかった。当初は熱心な様子でマロン派について語っていた女性が、いまや口をつぐんでいる。ひさしの張りだした屋外のスペースでコーヒーを飲みながら雑談をする、そんな穏やかな時間帯の会話だったのだが、話はそれ以上すすまなくなってしまった。

つまり、たとえ一般的には宗派主義的な語り方がなされるにせよ、こちらも同様なことをしようとする、どこかぎくしゃくしたやりとりとなってしまうのである。

そこで本稿では、この「失敗」の経験を手掛かりに、レバノン社会におけるコミュニケーションの特質を踏まえながら、集団やカテゴリから「流れ」に視点を移行させる可能性について検討してみたい。

第2節 堀内正樹の問題提起

人類学者があたりまえのように用いる集合的な概念について、堀内正樹は「境界的思考から脱却するために」という論考において中東研究の視点から批判をくわえている [堀内 2005]。

この論考の議論の核には、ネーションやアイデンティティといった、西洋的な「境界的思考」とは異なる思考が、中東には存在してきたのではないかという指摘がある。なおかつ、グローバリゼーションがすすむ世界において、そうした境界的思考が有効ではなくなってきたのではないかという問題意識もみられる。論考の根底にあるのは、同時代の動きをみすえた批評と、われわれも人類学においてそうした思考を自明視しすぎてはいないかという反省の精神である。

この議論は、きわめて長い歴史的射程をもっている、その全体についてここでとりあげることは難しい。本稿に関係するのは、このうち、中東における境界的思考とはちがう思考とは何かに関する議論と、それをうけてわれわれはどのような知識を創りだすべきかに関する議論である。

中東社会に形成されてきた、境界的ではない思考として堀内が目するの、クリフォード・ギアツが提示した、モロッコにおける人の区別のしかたである。ギアツはもともバザールにおける経済活動を論ずる意図で、多種多様な品質の商品から、値段に見合ったものを採り当てる情報探索的な振る舞いに注目した。堀内は、自身のモロッコ調査の経験もまじえつつ、ギアツの論点を人間関係の形成や、そこから生ずる社会のありかたへと敷衍させ、「バザール型社会」の名のもとで、この社会の思考の特徴をつぎのように整理している。

バザールには多種多様な人間が集うが、お互いの素性を明らかにし、円滑な商取引をすべく、バザール型社会では、人の区別はきわめて重要である。区別の基準は明確に存在する。まずは、言語、宗教、出身地、職業、営業形態など、事細かな区別にしたがってある個人の性格づけがなされる [堀内 2005: 26-29.]。

重要なのは、こうしたアイデンティファイのしかたが固定的でないことである。ある特定のしかたで個人がどのような存在であるかが決定されるとしても、それは特定の状況 (例えば、あるモノの取引といった状況) において決定されるものであり、状況が変われば、同じ人物がまったく別の基準にもとづいてアイデンティファイされるのである。いわば、バザール型社会における人の区別は「区別されつづける」ところにその本質があるのだといえよう。

これにたいして、境界的思考はこのバザール型社会の論理を倒立させたようなしかたであられる。すなわち、ある特定の区別 (た

たとえば、アラブとベルベル)が、あたかも自明であるかのようにして、他のさまざまな差異を捨象し、人の多様性を縮減したところで適用されるのである。それは「自明な」論理であるから、バザール型社会のような「区別されつづける」、時間的なプロセスをふくまない、無時間的な論理である。

堀内はこうした知見をもとに、「境界的思考」からのがれて「非境界的思考」に目をむけ、そうした思考にもとづく「非境界型世界」を探求すべきだと提唱している[堀内2011]。ここで注意したいのは、非境界的思考というのが、境界的思考と対照されるしかたで、「非境界的思考とはこれこれのことである」という風には規定されていない点である。そもそも、否定形で示されるのだから一義的に定義しようもないし、定義してしまえば、それはまた別のしかたで「境界」を呼びこんでしまうのだから、非境界的思考が定義されないというのは、あたりまえのことではある²⁾。

しかし、堀内にとっておそらく重要なのは、ひとつの概念をめぐる、そうしたリジッドな彫琢ではない。そのことがわかる箇所をみてみよう。

知識は万人に開放されていなければならない。特定の人々(たとえば某国民なり知的エリート集団なり)が知識を占有するとき、それはすでに境界に囲い込まれた不毛なものといわざるを得ない。知識の集権化や特定の集団への依存を回避して、万人への開放性という条件を実現させるためには、知識はあらゆる場所でのローカライズが可能でなければならない。そのためには、知識は常にさまざまな人々の生活上の要請に応えられるだけの具体性と柔軟性をもっている必要がある。人々の具体的で多様な

生活から遊離すれば、知識はいともたやすく境界の内側に閉ざされてしまうからである。[堀内2005: 46-47.]

つまり、非境界的思考の内実をさいしょから与えることは、そもそも目指されておらず、むしろ、その内実についてはオープン・エンドにしておく配慮がなされているのである。「生活上の要請」がまずあり、そのうえで初めて知識がついてくる、「ローカライズ」される。これはいわば、バザール型社会について述べた箇所でもみた中東の人々の生きかたを、われわれの学術的知識に活用しようとする試みだとはいえないか。

ところで堀内は、非境界的思考の内実は規定せずとも、その形式や方法については一定のビジョンをしめしている。すなわち、「対話」である。

なるほど、自身モロッコをフィールドとし、かの地を舞台にラビノー、クラパンザーノ、ドワイヤらによって書かれた実験民族誌にたいし強い関心をはらってきた堀内[1984a, 1984b, 1995a, 1995b]にしてみれば、実験民族誌をその一部として議論されたポストモダン人類学[たとえばマークスとフィッシャー1989]にそくした選択として、「対話」に注目するのは自然な展開かもしれない。

しかし、ここでもまた、非境界的思考の場合と同様、これこれの学説史があるがゆえに、つぎはこの概念をもちだすといったことに関心が払われているのではない。やはり、中東の人々の生きかたを、われわれの学術的知識に活用しようとする試みとして「対話」についても理解する必要がある。

バザール型社会のポイントのひとつは、モロッコの人間はたしかに他人を区別するが、しかし、この区別はなんどでもやりなおされ、規定されつづける性格をもつということ

2) じっさい、堀内自身が「みづから『非』という表現を用いているあいだは、依然として境界型世界に立っている。『非』を用いずに、その世界自体に立ち、その世界のことばで語ることはできるはずである」[堀内2011: 15.]と述べている。

あった。この、他人のアイデンティフィケーションがプロセスとして、時間的な性格をもつこと。このことが、堀内の提唱する「対話」にもいかされている。つぎの箇所は、堀内のこうした論点をよく示している。

対話から生ずる知識は当然その場でのみ成立する曖昧で暫定的なプロセスという形をとる。だがそれは、別の機会に別の人とさらに検討を加えてゆくことを可能にさせる柔軟性を持ち、ある場との密着性が別の場への適用可能性を開いてくれるのである。このほうがむしろ開かれた知識なのだと見える。[堀内 2005: 47.]

ここで、つぎのように考えることが可能だろう。堀内が提起した問いは、さしあたり、モロッコにおける人の区別のしかたに基礎を置いた議論であった。この部分を論じた箇所を読んでいると、モロッコ社会における人の区別というのは、まずははっきりとしたものだということがうかがえる。ギアツに近い立場でモロッコの調査をおこない、「現実の社会的構築」を論じたローゼンの著作にも、こうした点はうかがえる。ローゼンがモロッコ人の友人と連れだって歩いているとき、別の人物がローゼンをお茶に招こうと、「私はこの男性にたいして権利がある」と述べた。するとローゼンの友人は「それは権利ではなく好意だ」と反論した。それから、この両者は数分にわたり議論したらしい [Rosen 1984: 69.]。つまり、相互行為は、状況をストレートに定義する言葉によってなされてゆくのである。

ところで、堀内のイメージする「対話」が、インタビュワーが質問をし、インタビュイーがそれに答え、そのやりとりが続くといったものにとどまらない、広い意味合いが含まれていることを確認しておきたい。むしろそのような調査のやりとりには一見ネガティブに働くような、沈黙、応答の拒否、質問の無視

といった事柄を含めたうでの「対話」である [堀内 1984a]。したがって、それらの事柄は単なる否定的な要素としてはとらえられていない。むしろ、人類学者の側の前提に揺さぶりをかけ、知的な枠組みや調査者としての態度に変容を積極的に呼びこんでいくための重要な契機としてみなされている。

そのため、堀内が手がかりとするモロッコにみられる、人の区別をはっきりさせるという点についても、そのこと自体が重要なのではないのだと考えることができる。むしろ、明確にする／しないがどうであれ、対話が続けられるということが重要なのである。

筆者の調査によれば、対話が続けられることは、人々の情報の扱いかた、とりわけ、スパイと見なされる人びとの交流において具現化されていたと考えられる。次節では、調査資料に加え、内戦における暴力のとらえかたに新しい観点をもたらした研究を紹介し、レバノンの文脈で検討してみたい。

第3節 レバノンにおける情報の流れ

さきにレバノンの宗派をめぐる多様性についてふれた。国家全体でみれば、宗派が17も存在する点を思いだしてほしい。ただ、それぞれの宗派は特徴的な分布を示しており、レバノン国内のどこへ行っても、つねに17もの宗派の信徒がみだせるというわけではない。たとえば、マロン派キリスト教徒であればレバノン山脈に多く、シーア派ムスリムであれば、レバノン南部やベカー県北部に多いといったパターンがみられる。もちろん、首都のベイルートといった大都市であれば、おそらくあらゆる宗派の信徒が居住するのであろう。しかし、地方の町や村落であれば、宗派的な複合の度合いはそれほど高いものではない。

そのなかで、ベカー県中部は、そうした複合性が相対的に高い地域であるといえよう。筆者の調査地であるカップ・イリヤース

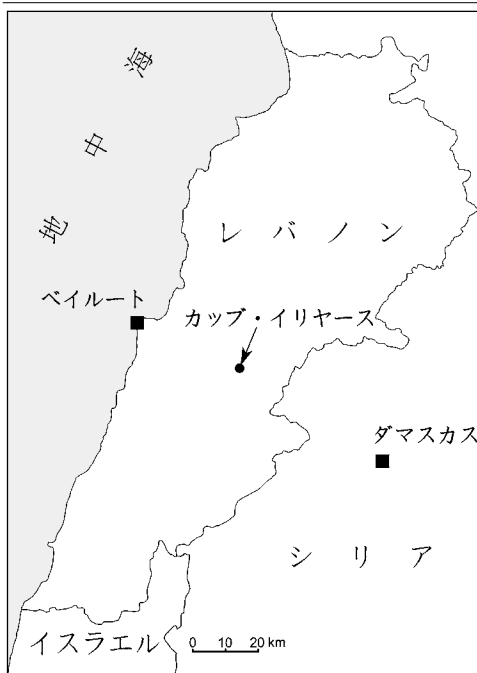


図1 調査地の場所

(図1)では、スンナ派がおそらく最大の集団であるが、それにくわえ、いくつかのキリスト教の宗派(マロン派, ギリシア正教, ギリシア・カトリック, プロテスタント)が存在する。本稿の冒頭に記したやりとりは、こうした複合性を背景になされたものであることを理解する必要がある。

それにくわえ、レバノン内戦(1975-1990年)の経験が、人びとが情報をとりあつかうしかたに影響を与えていると思われる³⁾。とりわけ、アラビア語でムハーバラートと呼ばれる諜報活動に従事する人物をめぐる想像力、猜疑心は、情報の流れに顕著な傾向を与えている。

内戦当時、ベカーの中央部にあり、ベイルートとダマスカスをむすぶ街道にも近かったカップ・イリヤースには、一定の地政学的重要性があった。じっさい、シリア軍がベカー

地方に進駐したさい、カップ・イリヤースにも「事務所 (*maktab*)」が置かれたらしい。住民のなかにはシリア軍とむすびつくことでさまざまな利益を得ようとする人もおり、2005年にシリア軍がレバノン全土から撤退したのちも、こうした人びとがいまだに影響力を行使しうるのではないかという恐怖感のはこっている。

筆者自身も、こうした想像力にからめとられたまま、調査を行わざるを得なかった。日本人であれば、ただちに連想されるのは「日本赤軍」とのつながりである。かつてレバノン国内でパレスチナ人と共闘していたこの集団がいま存在しないことは、まったく問題にならない。単に外国人がやってきたことそれ自体が、そのさきに何らかの国家的な権力があり、それが自分たちの生活に悪影響を及ぼしうることを意味するのである。

こうした判断は、ほんの些細な差異の情報にもとづいてなされうる。たとえば、筆者が雑貨屋にいたときのことである。店先で隣人のジョルジュに会ったのだが、かれは、店に品物を運んできた車の助手席に座っていた男性と話をしていた⁴⁾。すると、今度はその男性が筆者に話しかけてくる。よく人びとに聞かれるような、どこから来て何の仕事をしているのかといった質問であった。ジョルジュと一緒に店をでると、かれが、あれはムハーバラートの可能性がある、何で運転手が池田の仕事に興味を持つのか(反語表現なので、「持つわけがない」という含みがある)、あれはムハーバラートかもしれない、と言っていた。つまり、なにかすこしでも目立つ動きが感じられると、目立つことそれ自体の背後に悪意があるかのように解釈されるのである。

それでは、いっけん際限のない猜疑心にしたがい、人びとはどのように対応しているのだ

3) レバノン内戦が地域社会にあたえた影響については、資料の欠落や調査の困難さもあり、まだわからないことも多い。強制的な人口移動・人口流出[Kasparian et al. 1995]や記憶[Kanafani-Zahar 2002]などの観点からの研究はなされている。

4) 以下、調査地の人物名はすべて仮名である。

ろうか。このジョルジュ氏の場合をみてみよう。

タラールという、目が不自由な老人がおり、かれはいつも杖をついて歩いている。かつてはウチワマメ (*tormos*) をゆでたものを売りあるく仕事をしており、「ウチワマメのタラール」と呼ばれていた。

タラールについて、本当に目が見えないのかどうかを疑う人もいる。筆者自身、かれは本当は目が見えるのだと人々が言うのを耳にしたことがあったので、タラールは少し目が見えるよね?とジョルジュに尋ねた。すると、ちゃんと見えるんだ、彼はムハーバートだろう、それは確かだけれども、誰のためにやっているのかはわからない、誰のためか、それはわからないと言っていた。それから、父親はハマ出身のシリア人らしい、と付けくわえた。

父親がシリア出身だという情報が、タラールがムハーバートであることをほのめかすために持ちだされたのかどうか、確定することはできない。しかし、少なくとも言及に値する差異がタラールにはあることが提示され、かつ、それが隣国のシリアにつながるものがわかれば、そのことをもってムハーバートと結びつけることはたやすい。

筆者は、タラールが本当にムハーバートなのかどうかよりも、そのような想像力をもって生活することのほうに関心があったので、「いつもそんな風にムハーバートがいるというのは疲れませんか」とジョルジュに尋ねた。すると、いや、疲れないよ、ただ、自分は、彼とは政治と宗教の話はしないことにしていると言っていた。ジョルジュによれば、タラールは、誰かが話しているところにやってくると、少し目をあけて話し手が誰なのかを確認し、その会話を聞いてから立ちさるのだという。

スパイとおもわれる人物にたいするこうした対処のしかたは、レバノン人の社会学者サミール・ハラフによる、戦争の日常化の議論

により説明しうる。

ハラフは、レバノン内戦において、特定の民族や宗派的属性をもつ集団を標的とした虐殺や報復（パレスチナ難民キャンプを狙ったものなど）がみられはしたが、マス・スケールでの暴力や組織的な暴力は相対的に少なく、むしろこの戦争でのグロテスクな病理というのは、暴力が日常化し、長引き、拡散したところに求められるべきではないかと注意を喚起している [Khalaf 2002: 235.]。

虐殺に相当する大規模な事件が彼の言う通り、相対的に少なかったか否かは、筆者はただちに判断することはできない。しかし、暴力を日常の側に引き寄せて見直すアプローチは、宗派主義に関する事柄をコミュニケーションの側に引き寄せて見直す本稿の立場にとって、検討すべきものを含んでいる。

ハラフの議論は、レバノン内戦の議論が、たいていの場合、それがなぜ、どのように生じたのかを語るにとどまっていることへの批判として提出されている。そうした議論では、なぜ15年間にわたり内戦が長期化したのかが見えにくくなってしまおうというのが、彼の問題意識にある。ハラフはこれに対し、むしろ一般の、軍人でも民兵でもないごく普通のレバノン人自身が、暴力が生ずる事態をどこかで受け入れたがために、暴力が長期化し、あらゆる場所、あらゆる時に起きるのを許容し、そのようなものとしての日常に適応してしまったのではないかと論じている。

この戦争 [レバノン内戦：池田注] でみられた危険な残忍さがいかに常態化され (*normalized*) 飼いならされたか (*domesticated*) を明らかにする必要がある。……戦争を「無菌化 (*sanitizing*)」し、日常のルーティンにすることにより、脅かされた側の人びとが戦争の被害を生き抜くことができた。しかし、そのようにすることで、この戦争がいつそうだらだらと続き、拡散することを許してしまったのでもある。 [Khalaf 2002: 234.]

ぞっとさせるようだが、戦闘は、ある意味で、日常化されルーティン化されることにより続いたという部分が大きい……グロテスクなものは身の回りのものとなり、毎日なされるルーティンとなったのである。……実際、残虐に荒れ狂った戦争というのは、無害なしかたで *ahdath* となったのである。この「無菌化された (sanitized)」名称は、何気なく用いられ、冷ややかで無関心な調子を伴った。これほどまでに悲惨な、恐ろしい病理を記述するには実に情けない言葉である。しかし、不幸にもその犠牲者となった人々が、破壊を「生き延びる」余地を生み出したのである。[Khalaf 2002: 237.]

ハラフは戦争の「無菌化」という表現を、暴力、流血、秩序破壊的な行為が、異物として除去され、本来の日常の秩序が回復されるべきものとしては見なされず、むしろ日常のなかに当たり前のよう存在してしまい、誰もそのことに違和感を感じなくなる事態を表現するために用いている⁵⁾。その例としては、民兵になることが「ファッションナブル」で男性性を満たすものとして、つまりかっこいいものとして映ったことや、子供たちの遊びのなかにも、葉を集めたり、戦闘ごっこをしたり、実際の戦闘で破壊されたモノについて詳しくなる（一般の子供たちのように昆虫や植物に詳しくなる、のではなく）といったことを通して、戦争が入り込んだことが挙げられている。

なかでもハラフが重視しているように見受けられるのが、二つ目の引用箇所にもみられるように、レバノン内戦が「戦争」と呼ばれず、「アフダース (*ahdath*)」と呼ばれることである。

通常、「戦争」を意味するアラビア語は「ハ

ルブ (*harb*)」であり、「レバノン戦争：ハルブ・ルブナーン (*Harb Lubnan*)」と言えば、レバノン内戦を指したものとして理解される。しかし、筆者の経験とも合致するのだが、より日常的な言いかたでは「アフダース」が用いられることが多い。辞書的には、これは「出来事」「事故」を意味する語 “*hadath*” の複数形である [Wehr 1994: 189]⁶⁾。ハラフは、レバノン内戦を指すのに「戦争」ではなく、「出来事」「事故」を意味するこの言葉が用いられていることに、「冷やかな無関心」[Khalaf 2002: 237.] があらわれていると指摘する。すなわち、破壊や暴力を、異常な出来事として特別な表現を与えるのではなく、いわばそうした異常性を切り下げられたものとして、レバノン内戦が表現されるのである。結果として、日常の中にレバノン内戦が存在することを人々が許容するようになり、戦争と日常、戦時と平時といった、我々であれば区別し、前者を異常な事態とみなしそうな事柄が、レバノン人の間では区別されない、もしくは少なくともその区別が曖昧となり、しかも前者が後者に呑み込まれるような仕方で位置づけられたのである。

先に、筆者がタラールの件でジョルジュに対して、「いつもそんな風にムハーバラートがいるというのは疲れませんか」と尋ねたことも、やはり戦争と日常を区別する発想に基づいていたと言える。「本来は日常生活のなかに無い方が自然に思われるものがあるという彼らの日常」という仕方で、コントラストを付けたうえでの質問だったのである。ただし、そのような日常が異常ではないか、という聞きかたにはなっていないことに注意したい。あくまで、それを生きるということに疲労を覚えないかと、彼らの感覚を尋ねた形の質問なのである。

ジョルジュはそれに対して、疲れませんが、

5) 「無菌化」の言葉は、社会学者のノルベルト・エリアスの暴力に関する議論から借用されている。

6) 筆者の経験では、レバノン内戦を表す以外に、「交通事故」の意味で用いられることも多い。

タラールとは政治と宗教の話はしないという風に答えた。特定の話題に触れないということは、それ以外での交流は保つということでもある。実際、タラールはたびたびジョルジュのもとを訪問した。ジョルジュはそのたびにコーヒーをふるまい、タラールの目が不自由なのでタバコをくわえさせてやるといった具合に、相応のもてなしをしていた。つまり、スパイの疑いがあり自分たちに危害をおよぼす可能性を持つ者であっても交流を保ち、そのいっぽうで常に警戒することを忘れず、その結果「流れ」をおぼえないという醒めた接しかたは、内戦の産物であるスパイ、あるいはその疑念であっても、日常のやりとりのなかに組みこまれ、位置づけられていることを示している。

ここで重要なのは、誰がスパイか、本当にスパイかを決定することが重要ではないことである。確かに、ジョルジュはタラールがスパイではないかという疑いを持っていた。しかし、どの国に対してのスパイなのかということはわからないと言っていたし、そのことを確かめようとする様子もなかった。父親がシリア人だということに言及はしても、だからといってタラールがシリアのスパイだとのめかしたようには聞こえなかった。ジョルジュにかぎらず、カップ・イリヤースの住民は、英米仏独、ロシア、イスラエル、サウジアラビア、イランをはじめ、欧米・中東の様々な国（あるいは日本）がレバノンに介入し、スパイを送りこむ可能性を常に排除しないからである。その点では、国籍とスパイ活動との結びつきにはきわめて柔軟な想像力を持っていると言える（筆者は一度、あるシリア人女性が、服の着こなし方を根拠に、バハレーンのスパイではないかと疑われているのを耳にしたことがある）。

むしろ、そのような疑問を常に留め置くこ

とで、事態が流動的にされているのだと言える。すなわち、情報のあつかいかたが、常に開放性が維持されるような措置がなされるのである。

このように考えを進めると、冒頭に記したエピソードを新しい視点で解釈する余地が生ずる。すなわち、宗派を際立たせることを回避するという人びとの対応は、外国から来たスパイがその情報を利用しようとするのを回避するというよりは、日常のなかで情報があつかわれるさいの、流れを重んじる手つきに筆者が逆らったからなのである。

したがって、人々にとっての力点は、たとえば、何々派と何々派の差異が際立つことを避けるといった具合に、情報が固定化されないことにある。そのため、我々の側でも、人々のそうした関心に応えうる記述を生み出していかなくてはならない。

次節では、その一例として、ある単純な行為の背後に、ここまでのところで検討したような、流れに対する人々の関心が現れている例について考えてみたい。

第4節 シャッターを閉める

ここで、概念規定について若干触れておきたい。「流れ」という言いかたに、アパデュライの「文化フロー」をめぐる議論が想起されるかもしれない [アパデュライ 2004]。筆者としては直接的に彼の議論と接点を見出すことを意図していない。実際、この「流れ」という表現は、レバノンでの調査経験を現時点でもっともよく表現できる言葉として、当座の利用に資するよう選んだものである。したがって、不適切であることがわかれば直ちに廃棄するといった類の位置づけと考えている。本稿全体のタイトルを「試論」としたのも、そのような意図に基づく⁷⁾。

7) ほかに、たとえばチクセントミハイによるフロー概念が知られている [チクセントミハイ 1996.]。しかし、これは心理学的なアプローチに基づいており、幸福や満足といった「意識」の分析を重視したもので、本稿とのかかわりは一層薄い。

ただ、アパデュライが文化フローの議論を考案したことの背景に、社会のイメージを流動的なものへとシフトさせる意図があるのは興味深い。すなわち、従来の、特定の地域と民族集団と文化とを緊密に結びつけて人類学的対象を把握するという前提が有効ではなくなり、土地から切り離されグローバルなスケールで移動するものとして文化概念を更新すべく「フロー」という言葉が採用されているのである [アパデュライ 2004: 特に 92.]。

流動的で不定型なイメージで世界をとらえようとする姿勢については筆者も同意する。いわば、筆者が集合的カテゴリを通してのレバノン理解に失敗し、その結果として「流れ」という言葉を採用したのと、アパデュライが、古典的な文化概念を批判的に更新すべく文化フローの概念を考案したのは、同時代の相似とも言える。

ただし、本稿とのかかわりでいえば、違いのほうが大きい。アパデュライの議論は、マクロかつグローバルなものと同様にミクロなものを総合的にとらえうる人類学の構想としてなされており、本稿の議論がそこまでの包括性を目指していないところは決定的に異なる。

さらに、筆者がここで「流れ」と言うとき、それは単に情報が社会的にどのような布置をとるかということにとどまらず、情報を扱う人々の態度まで含まれる。そのため、無視や沈黙といった、情報が消えていく場面も、やはり「流れ」に含まれるのである。それに対して、アパデュライの文化フローの議論は、より実定的な視点で組み立てられているように思われる。全体としては、人間やイメージの移動にともない、それらがどのように新しい仕方で交錯し、新しい事態を出現させるのか、といったことに関心が向けられているのである。

では、実際の記述の試みに移りたい。ここでは、第3節ですでに登場したジョルジュ・エステファーンという、カップ・イリヤースに住むギリシア正教徒の老人をとりあげる。

彼は1943年に生まれ、夫人との間に二人の娘がいる。彼女たちはそれぞれレバノンとフランスの別の町で夫と子どもたちとともに生活している。そのため、カップ・イリヤースでの生活は、もっぱら夫人とふたりで営んでいる。

ジョルジュは、若いころは茶店 ('*ahwe*) やレストランやガソリンスタンドの従業員として、何度か職を変えながらはたらき、のちに衣料品をあつかう商店をみずからかまえた。ところが、レバノン内戦の過程で店はつぶれ、そののちは賭博場の従業員をしたり、ふたたび商店を開いたりなどしたがいずれもはかばかしいものではなかった。いまではリタイアし、夫人の収入、娘たちや米国に暮らす親族からの援助に頼る生活をしている。

カップ・イリヤースは、屏風状につらなる山々の斜面に築かれており、おおまかにいって、もっとも高所にはマロン派が、すこしくだった中腹にはギリシア・カトリック信徒およびギリシア正教徒が、さらにくだった、平地に近いあたりにはスンナ派ムスリムが暮らしている。ジョルジュの自宅は、周囲にスンナ派の多い、平地にちかいあたりにある。自宅の前にモスクがあるため、家の前の通りは礼拝にやってくるムスリムが普段からゆきかっている。

自宅から一軒おいたところに、ジョルジュの生家がある。現在では、鉄筋コンクリート造りの三階建て、四階建ての建物があたりまえになったが、ジョルジュの生家は、天井部分に木の梁がもちいられた昔の様式を残す、二階建ての小さな建物である。一階と二階は独立しており、二階はふたりの姉が生活するスペースである。一階は、もともと家畜を収容する空間だったらしい。そのため、窓は小さく、入口にはシャッターが据えられ、全体として暗い。じっさい、現在でも大半は物置として用いられている。しかし、入口にいちばん近い部分は、かつてはジョルジュの兄(故人)が床屋として使っていた場所であ

る。当時の様子をほうふつとさせる大きな鏡があり、また、二脚のソファ、テーブル類、ズィンガー社のミシン（お針子だった姉がかつて仕事に使っていたもの）などが置かれている。

ジョルジュは糖尿病を患っていて足が悪く、思うように出かけることもできない。かれは毎朝、自宅から生家の一階部分へとやってくる。夫人の意向で、自宅では好きなようにタバコを吸わせてもらえないので、生家の一階へやってきて、タバコを吸い、ラジオで音楽を聴き、ときおりやってくる友人や隣人たちといろいろな話をし、11時頃の昼食時には自宅あるいは二階部分にあがり、食後はふたたび一階部分ですごし、午後のなかばにシャッターを閉め、自宅に戻り、早めに夕食をとり就寝する、というのがかれの日課である。

筆者は、ジョルジュの自宅と生家のあいだに挟まれた家の一階部分を借りて住んでいたこともあり、いつしかジョルジュ夫妻との交流をもつようになった。

ジョルジュが一階にいるあいだは、いつも戸口が開けられている。そこへ、さまざまな人たちがやってきては去っていくというのが、一階部分で観察される光景だ。そのための、だいたいいつもコーヒーと水が用意されている（コーヒーは、二階に住む姉にいらしてもらおう）。ムスリムの隣人が、玄関先を掃除しながら、挨拶や世間話をしにきたり、友人が、仕事の行き帰りに寄っていったりする。唯一の親友（ハサン）は、だいたい毎日やってきて、昼であればコーヒーを飲み、仕事の終わった夕方であれば、二階で酒を飲むこともある。ときには物乞いが来たり、行商人が来たりする。ジョルジュがそれほど親近感をいっているわけではない人が来て、ティッシュペーパーを何枚も使ったり、コーヒーや水を飲んだだけでそそくさと立ちさるのを、かれはなかばあきらめて受けいれている（そして、そのことで、たまに筆者に愚痴

を言う）。小さな子たちが来れば、ニコニコと相手をし、ときにはその行儀の悪さをしかる。プライベートというよりは開放的で、パブリックというよりはもうすこし私的な、独特の空間である。

ある日、この日は10時頃にシャッターを開けたと言っていた。筆者が訪れたのは、10時半頃である。11時に、隣人のピラルを交えて昼食をとり（薬を飲むのに合わせるため、ジョルジュの昼食の時間はとても早い）、12時すぎに、別の隣人のウサーマが来て、すこし話をしていった。14時少し前に、隣人のサアド（ピラルの父親）が、農作業を終えてやってきた。サアドは水とコーヒーをいつものように飲んで、筆者が持っていた新聞を読み、昼食にするからと言って帰っていった。

この日、きょうはジョルジュの機嫌がよいと思っていたのだが、昼を回ると、少しずつ疲れているように見えてきた。ときどき、むっつりと黙りこんでいる。親友のハサンが来ても話が弾まない。14時、というのは、ジョルジュにかぎらず、人びとの生活にとってひとつの基準（基準帯、というべきか）である。このころに昼食をとり、日が傾きはじめる16時や17時までには、午睡をとる人もいる。ジョルジュが疲れているなと思ったときは、筆者は14時頃にその場を辞すようにしている。すると、かれはシャッターを閉め、二階にあがり、風通しのよい場所に置かれたソファにねそべって、休むのである。だからこの日も、そろそろ切りあげどきだと思った。

ハサンが帰ったのち、筆者はジョルジュに「ここを閉めますか？」と尋ねた。何時になった、と聞くので、14時ですと答えた。「顔が疲れていますよ」とつつける。ジョルジュは、ああ、暑いからね、と渋い表情をした。筆者は、では、閉めたらいいじゃないですか（*laken, sakkir*）と言った⁸⁾。ジョルジュは何も答えない。少し間を置いてから、「さあ、ほら（*yalla,*

yalla)」と軽くせきたててみた。ジョルジュは「何を『ほら』なんだ?」と言った。筆者は、ここを閉めたいのでしょうと答えた。するとかれは「もう少ししたらだ」と強めに言った。それを無視して、われわれの目の前にあったコーヒー茶碗とラクウェ（コーヒーをいれる容器）をとって、これ、上に上げましょうか(=二階に片付けましょうか)?と尋ねてみた。すると、「ああ、頼むよ」とジョルジュは言った。それから、片手で手すりをつかんで(二階へ通ずる階段を)上がらないといけないから、そうすると(茶碗をいくつかとラクウェを一緒には)持って行けない、と言った。

筆者は、他の人が飲んだあとの茶碗を集めて重ね、いったんテーブルの上にまとめ、そばにあった椅子にふたたび座った。筆者はこのころまでに、「流れ」というものが相互行為において重要なものだろうと、ぼくぜんと考えていたので、このまま二階にあがったら、それをきっかけに、ジョルジュがシャッターを閉めるかもしれない、と考えたのである。そこで、あらためて椅子に座って、暑いですね、と言った。ああ、疲れたよ、とジョルジュは答えた。それに対して何も返答せず、そのまま黙っていた。ジョルジュも黙っていた。

1分も経たないうちに、「いちばんいいのは、ジュースを買ってくることだ」と、ジョルジュが言った。この日の前日、ジョルジュはパイナップルのジュースを近所の雑貨屋から買おうと思っていたのだが、雑貨屋が夕方になるまで店を開けなかったので、少なくともこの日の昼過ぎの時点まで、ジョルジュは、それを買いに行けなかったことを思いだした。同時に、これが、シャッターを閉めるきっかけになるのだろうか、と判断した。

昨日、店が開いたときに買ってこなかったのですか?と尋ねた。ジョルジュは、誰も買いに行ってくれる人がいなかったからね、自

分も行かなかったし、と答えた。すぐにつづけて、「買ってきてくれる?」とこちらに依頼してきた。いいですよ、買ってきましょう、と答えた。だったら、さっき言ってくればよかったのに、と、つい20分ほど前に、その雑貨屋に行ったことを示唆しながら、小言のように言ってみる。うーん、まあ、金がないからなあ、とつぶやきながら、ジョルジュは立ちあがって、ジュースを買う金があるかどうか、数えだした。

この茶碗はどうしますか?と尋ねると、袋に入れて自分が持って行こう、と言った。じゃあ、まず私がそれを二階に片付けて、それから雑貨屋に行ってきます、と筆者は言った。頼むよ、とジョルジュが言う。茶碗とラクウェを二階にあげて、もういちど一階に降りると、ジョルジュはちょうどシャッターを閉めているところだった。

第5節 区切りと流れ

筆者は二階から一階へと降りる階段の途中で、シャッターが閉められる光景を目にした。シャッターの閉鎖は、ジョルジュの日課の区切り、一階での活動を終え、二階に移ることに不可欠の区切りである。午後遅くなると、もう友人たちも寄りなくなるからという理由で、この時間帯に一階部分が開けられていることはほぼないと言ってよい。実際には、夕方になると、仕事を終えた友人たちがジョルジュのもとを訪れるのだが、ジョルジュは彼らを、二階部分、もしくは自宅で対応する。つまり、シャッターを閉めるというのは、ジョルジュの日課が推移するうえでは決定的な区切りであると考えてよい。

また、この一階部分については、さきに「プライベートというよりは開放的で、パブリックというよりはもうすこし私的な」と表

8) 文法上「命令形」に相当する“sakkir”を用いてはいるが、だからと言ってこれが「命令」として受けとられるのではない。筆者の経験上、一定の親交があれば、相手の行為をうながす際、命令形はしばしば用いられる。

現したが、そうした曖昧な性質の空間が、このシャッターを閉める行為により、翌朝になるまでは完全に閉ざされることにも注意したい。レバノンの田舎の町や村では、男性たちが集まる茶店を見かけることがあるが、カップ・イリヤースにはそうした場所は存在しない⁹⁾。もちろん、個々人の家に友人たちが互いに訪問する光景はみられる。また、たとえば様々な種類の店舗で、店主や店員の友人たちが、時々訪問してはおしゃべりをし、コーヒーを飲んで帰っていくということもしばしば行われる。それらの場合、それなりに親密な人間関係を基盤にして訪問という行為がなされる。しかし、ジョルジュの生家の一階部分は、すでに触れたとおり、さらに多様な種類の人びとがやってくる空間である。だからこそ、筆者自身、日常的にその場所を訪れ、ジョルジュと話をすることができた。

ジョルジュは決して社会的で常に人の輪の中にいたいという人物ではない。先にも記したように、図々しい訪問者に迷惑をかけられることもたびたびである。しかしながら、「人々が来るから」という理由で、ジョルジュは毎朝シャッターを開けるのである。

つまり、シャッターを閉める行為は、ジョルジュの日課として重要な位置にある。また、それは文字通りの仕切りとして、ミクロな空間の性格を一変させてしまう。しかし、その断絶を生み出す行為の背景に、ここで「流れ」と表現したような事態が認められるのである。

筆者は普段からジョルジュとの行き来があったので、昼間のこの時間帯に彼がシャッターを閉めるというのは、すでに我々の間では周知の事柄であった。にもかかわらず、筆者がその行為をうながしても、それが直ちに受け止められるのではないのである。もう少

し後にすると言ったり、沈黙が介在するなど、行為が決定的となる状況が生まれることが回避されている。

結局のところシャッターは閉められるのだが、その直接の契機となったのは、近所の雑貨屋でジュースを買うことという、まったく別の行為を介在させることを通じてである。

ちなみに、この例とは逆に、シャッターを閉める行為を介在して別の行為が行われた場合もあった。たとえば、もの売りがしつこく薦める商品に全く興味がないため、筆者に対して「昼食にしよう」と言いながら矢庭に立ちあがり、もの売りを帰らせたというような場合である。

第2節でとりあげた堀内の議論において、ある場面における人のアイデンティフィケーションが、それだけでは直ちに完結せず、別の場面において、同一人物に対して別のアイデンティフィケーションがなされることを、バザール型社会の特徴として確認した。ここから、アイデンティフィケーションがプロセスとして、「ある場との密着性が別の場への適用可能性を開いてくれる」[堀内 2005: 47.]という時間的な性格が生ずることにも触れた。

なるほど、モロッコ社会では、堀内の指摘やローゼンの観察にうかがえるように、相互行為における個々人の振る舞いや言葉というのは際立っている。相互行為の状況や、その状況に置かれた人がどのような存在であるのかが、まずはストレートに定義される。その率直さ、力強さに印象づけられるところとどまらず、さらにその先のプロセス、すなわち、アイデンティファイし続けるモロッコ社会の特質を指摘したのは、堀内の慧眼と言える。

しかし、ある行為（モロッコの場合は人のアイデンティフィケーション）と、その行為

9) 筆者はカップ・イリヤース以外の町や村については断片的な見聞しかしていないので、ここでの記述はもちろん多分に印象にもとづくものである。ただ、他の町や村と比較したうえで、カップ・イリヤースにはそうした場所がないということは、カップ・イリヤースの人びとも問題なく認識できることではある。

が続けられるプロセスとは、次元が異なる。筆者が本稿で取り上げた例では、むしろこのプロセス自体への人々のこだわりが露わになったのだと考えられる。プロセスであることには執着し、実際に選ばれる行為は、あくまでもさりげない。筆者の「失敗」のように、最初からカテゴリを用いると、プロセスと行為の軽重のバランスがひっくり返ると、彼らには感じられたのではないだろうか。

ともあれ、このプロセスへの志向性が、最終的には明々白々な行為に帰着するとはいえ、その手前ではモノや言葉や行為の意味づけを限りなく流動的にさせた状態を作り出しつつ、あたかもそれのごく一部であるかのようにして、最終的な行為（ここではシャッターの閉鎖）がなされる事態をもたらすのである。「流れ」という言葉をあてがうことにより、モロッコ社会における人間関係と同じように時間的な側面を伴いながらも、人々による強調点がかかなり異なる側面を明るみに出すことができるのである。

第6節 展望

本稿では、宗派に関する筆者の（失敗）経験を手掛かりに、視点を転換することを試みてきた。そこでは、堀内による「対話」というアイデア、また、ハラフによる暴力を日常との関連で見直す議論が有用であった。そうした先行研究は、筆者が失敗ととらえたような経験のなかに、むしろレバノンの人々の力点が現れているのではないかという視点をもたらしてくれたのである。

そのうえで、さしあたり本稿では、宗派や内戦といった、いわばレバノン史、レバノン社会全体に関わる大きなテーマからいったん外れ、シャッターを閉めるというごく小さな状況を扱った。たとえ日常の些細な事柄では

あっても、大きなテーマに関わる論点が現れていると考えたからである。

たとえば、宗派（集団）を前提とし、それらの相互関係を（どこかビリヤードの球同士のぶつかりあいのようにして）描くことでレバノンを理解する試みはしばしば見られる。しかし、シャッターを閉める光景で得られた知見を応用し、たとえ宗派の区別が強固に据えられているような状況であっても、それは「流れ」の結果としてそのようなになっているのではないか、という風にとらえ返すことができよう¹⁰⁾。そういった問いの再構成につながりうるものであるならば、本稿の目的は果たせたものと思われる。

参考文献

- アパデュライ, アルジュン 2004. 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』(門田健一訳) 平凡社。
- チクセントミハイ, M. 1996. 『フロー体験——喜びの現象学』(今村浩明訳) 世界思想社。
- 堀内正樹 1984a. 「個人をあつかう民族誌の課題——中東研究におけるライフ・ヒストリーなどの問題点について」『アジア・アフリカ言語文化研究』27: 110-146。
- 1984b. 「中東民族誌の展開」『社会人類学年報』10: 189-203。
- 1995a. 「実験民族誌とタバカート——モロッコにおける二種類の記述」『民族誌の現在——近代・開発・他者』合田壽・大塚和夫編, 158-178, 弘文堂。
- 1995b. 「社会と文化——社会人類学から」『イスラーム研究ハンドブック』三浦徹・東長靖・黒木英充編, 235-239, 栄光教育文化研究所。
- 2005. 「境界的思考から脱却するために」『国際文化研究の現在——境界・他者・アイデンティティ』成蹊大学文学部国際文化学科編, 19-50, 柏書房。
- 2011. 「すでにそこにある場所をめがして」『民博通信』132: 14-15。
- マーカス, ジョージ・E.; フィッシャー, マイケル・M. J. 1989. 『文化批判としての人類学——人間科学における実験的試み』(永瀬康之

10) 実際に、カップ・イリヤースのあるキリスト教徒とムスリムとの交流（前者の貧しい老人が、後者の裕福な人物から古着を貰い受けようとした例）においても、本稿で扱ったような「流れ」が目立つ例を筆者は観察した。しかし、このことについては別稿で分析する。

- 訳) 紀伊國屋書店。
- Hanf, Theodor. 1993. *Coexistence in Wartime Lebanon: Decline of a State and Rise of a Nation*. London: I. B. Tauris.
- Kanafani-Zahar, Aida. 2002. "The Religion of the 'Other' as Bond: The Interreligious in Lebanon." *Religion between Violence and Reconciliation* (Thomas Scheffler ed.), 401-418. Beirut: Orient-Institut.
- Kasparian, Robert et al. 1995. *La population déplacée par la guerre au Liban*. Paris: L'Harmattan.
- Khalaf, Samir. 2002. *Civil and Uncivil Violence in Lebanon: A History of the Internationalization of Communal Conflict*. New York: Columbia University Press.
- Rosen, Lawrence. 1984. *Bargaining for Reality: The Construction of Social Relations in a Muslim Community*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Wehr, Hans. 1994. *A Dictionary of Modern Written Arabic*. Fourth edition. Ithaca, NY: Spoken Language Services.

原稿受理日—2013年11月30日